

岩手医科大学歯学会第57回例会抄録

日時：平成16年 3月 6日（土） 午後1時

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室（C棟 6F）

一般演題

演題1. 矯正患者の診療時間に関するアンケート調査について

○鈴木 里奈, 遠藤 陽子, 清野 幸男
三浦 廣行

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

目的：ここ数年本学歯学部附属病院全体の新来患者数は減少傾向にある。当科の新来患者数も過去5年間でおよそ4割減少していた。その原因の一つとして、本学の診療日や診療時間が患者さまのニーズに合致していないことから受診が敬遠されたのではないかということが考えられた。そこで患者さまの診療時間に対するアンケート調査を行った。

方法：平成15年11月から12月までの実日数25日間に矯正歯科外来を受診した患者さま536人を対象とした。当科の受付で調査の協力をお願いし、待合室や外来での待ち時間を利用してアンケート用紙に記入していただいた。

結果：調査対象の内訳は男196人、女340人であった。職業別では小学生が最も多く34.9%であった。診療時間に関する患者さまの第一希望は、平日では午前10時頃と午後4時から7時頃の二つのピークが、土曜日では午前10時頃に一つのピークがみられた。曜日に関しては土曜日の受診を第一希望とする患者さまが多かった。希望が叶った方は、時間では平日が40.3%、土曜日が46.8%であった。一方、曜日では42.0%であり、いずれも半数に至らなかった。時間と曜日の両者を合わせてみると希望が叶った方は26.5%であった。

考察：診療時間に関しては、平日は通院に要する時間および学校や仕事の都合でピークが二つに、また、土曜日は休日であるため、午後を有意義に使いたいという理由からピークが午前中の一つであったと考えられる。曜日については患者さまの学校や仕事に加えて、保護者の方の都合により土曜日の希望が多いと考えられた。この傾向は、当科の患者さまの年齢層が低年齢

層の児童、生徒が多いことが大きく影響しているものと推察された。

結論：診療時間に関して、現行の診療日、診療時間枠の中では患者さまの希望はなかなか叶えられていないことが把握できた。

演題2. OSCE において評価者は何を評価したか

○相澤 文恵, 米満 正美, 稲葉 大輔*
寺田林太郎*, 菅原 教修*, 石川 義人*
星 秀樹*, 虫本 栄子*, 藤澤 政紀*
清野 幸男*, 浅川 剛吉*, 小豆島正典*
佐藤 雅仁*, 戸塚 盛雄*, 福田 容子*
藤村 朗*, 立花 民子*, 松本 範雄*
客本 斉子*, 村井 繁夫*, 武田 泰典*
佐々木 実*, 平 雅之*, 水城 春美*

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座 同 OSCE 実施委員会*

目的：OSCEにおける複数評価者間の評価の一致度を高めるためには、評価者の評価領域判断を統一する必要がある。このことから、評価者の評価判断領域を項目別に検討し、評価の一致度との関連性を分析した。対象・方法：岩手医科大学歯学部第2回 OSCE トライアルにおける評価担当者53名を対象として、各評価項目が「技能」、「態度」、「知識」のどの領域を評価しているものとして判断したかを質問紙によって調査した。質問紙の回答は χ^2 検定、母比率の多重比較検定、Kruskal-Wallis 検定、Mann-Whitney の U 検定を用いて分析した。また、OSCE 評価の一致度は κ 統計量によって評価した。

結果：質問紙の回収率は73.6%であった。判断領域別に評価の一致度を比較した結果、領域数が少ないほど一致度が高い傾向にあったが、統計学的有意差は認められなかった。また、領域判断の全ての組み合わせと、「適切な」、「できる」を含む評価項目との関連性を分析した結果、それらの表現がある項目は「技能」領域として有意に判断された。さらに、評価項目中に

「適切な」、「できる」がある項目とない項目の評価の一致度を比較した結果、それらの表現がある項目の評価の一致度は有意に低かった。

考察：評価者の評価領域判断は評価項目の文章表現に依存する傾向があり、評価文作成者が「態度」、「知識」領域を評価する意図であったとしても、「できる」、「適切な」の表現の存在によって「技能」領域と評価者に判断される可能性が示された。さらに、評価項目中の「適切な」、「できる」の表現により、評価者の評価は主観に左右され、評価の一致度は低くなる傾向が示された。

結論：OSCEにおいては各評価項目の評価領域が明瞭になる文章表現を用いるとともに、評価者間で「何を評価するか」を事前に確認する必要があることが示された。

演題3. 下顎側切歯と犬歯の癒合の三例

○藤村 朗, 小野寺政雄, 大内まりえ*
三浦 廣行*, 野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座
同歯科矯正学講座*

目的：下顎側切歯と犬歯の癒合歯に遭遇した。乳歯全体における癒合歯の出現頻度は高く、約3%と報告されている。下顎乳側切歯と乳犬歯の癒合は出現頻度が高いほうである。一方、永久歯全体における癒合歯の出現頻度は0.3%と報告されている。下顎側切歯と犬歯の癒合は頻度が低いほうである。今回は顎模型による臨床歯冠の計測およびエックス線写真による観察結果を報告する。

材料・方法：下顎側切歯と犬歯の癒合が、症例1では両側性に、症例2では右側に、症例3では左側に観察された。すべての症例の顎模型による臨床歯冠の計測には精度1/100mmのノギスを使用した。臨床歯冠の歯冠長、幅、厚をそれぞれ計測した。症例1ではデンタルエックス線写真およびパノラマエックス線写真を、症例2ではデンタルエックス線写真を撮影したので、歯根の観察を行った。

結果：顎模型の肉眼観察から、歯冠が癒合しているものの3本、完全に分かれているもの1本(症例2)がみられた。エックス線写真から今回の3本のうち2本はすべて歯根で完全に癒合しており、歯髄はひとつになっていた。残りの1本はエックス線写真からの判読は不可能であった。臨床歯冠の大きさは、症例2の側

切歯を除いてすべて日本人平均値より10~30%小さい値を示した。症例2の側切歯は平均値より5~10%大きい値を示した。

考察および結論：癒合歯の癒合の程度は歯冠部が完全に分かれているものが一例あったが、他の3本は歯冠部での癒合が認められた。歯の発育において、下顎犬歯は切歯群とは歯冠、歯根の形成時期が異なっている。単に歯胚が近接しているという理由から、癒合を説明するのは危険であると考え。側切歯と犬歯の歯冠形成がほぼ同時に、しかも癒合しない状態で進み、歯根形成は完全に癒合した状態で進む必要がある。すなわち、癒合歯はこの形として形成された歯である可能性を否定できないのではないかと考える。

演題4. 抜歯部位にFDGの高集積が認められた1例

○高橋 徳明, 小豆島正典, 泉沢 充
坂巻 公男

岩手医科大学歯学部歯科放射線学講座

目的：fluorine-18 fluorodeoxyglucose (FDG) を用いた positron emission tomography (PET) は、治療後の評価や腫瘍再発診断における診断精度はCT・MRIより高いとされている。しかしながら実際に口腔領域でPETを行うと、癌組織とは思えないような部位にFDGが集積することを経験する。

今回、我々は舌癌のfollow up中に、6か月前に行われた下顎智歯の抜歯部位へのFDGの高集積を経験したので報告する。

材料・方法：患者は45歳、男性。平成4年、および8年に左側舌腫瘍により加療、その後follow upを継続し、平成9年に下顎両側智歯周囲炎にて両側智歯を抜歯した。半年後の平成10年に頸部リンパ節転移疑いのためFDG PET検査を施行、頸部リンパ節転移を疑う集積を認めた。

結果：FDG PETにて転移を疑うFDGの集積を認めたが、PET/CT fusion imageで抜歯窩への集積であることが判明した。

考察：抜歯後6か月経過した場合でもFDGが集積する可能性が示された。PET診断におけるfalse positive rate上昇の原因である扁桃などの生理的集積や本症例の様な抜歯窩への集積と腫瘍との鑑別は、CT等の形態学的診断法との重ね合わせによる、より正確な解剖学的部位の同定が不可欠と考えられた。

結論：抜歯部位におけるFDG集積はfalse positiveと